



TITLE:

帝国農会幹事 岡田温

AUTHOR(S):

川東, 蟬弘

CITATION:

川東, 蟬弘. 帝国農会幹事 岡田温. 經濟論叢 2004, 173(1): 53-71

ISSUE DATE:

2004-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/45609>

RIGHT:

帝国農会幹事 岡田 温

川 東 靖 弘

は じ め に

岡田温（おかだ ゆたか 1870年～1949年）は、明治・大正・昭和の3代にわたって、愛媛県および中央の帝国農会で活躍した、第一級の農村のリーダー、優れた農政家である。また、郷土で農民の立場に立って働き、農民の父として、慈父として慕われた人物である。さらにまた、郷土の純粋な青年達から推され、一時衆議院議員も務めた政治家でもある。

岡田温は、その職務中に集めた膨大な資料類を、生存中大事に保管・保存をしていた。また、温が1949（昭和24）年に亡くなったあと、岡田家は、温の残した資料を大変貴重なものとして取り扱い、やはり大事に保管・保存し続けていた。温のご令息である慎吾氏（愛媛県農業試験場長等歴任）が大分高齢となった1992年、自分は高齢でもう研究はできないので、若い人に父温の資料をつかって研究に役立ててほしいと、1992年9月と93年3月の2度にわたり、松山大学に温関係の資料の寄贈を申し出られた。その時の寄贈資料は3500点余りあり、貴重な資料が多数含まれていた。

1995年8月6日に慎吾氏が亡くなられた。その7年後の2002年7月、奥様の環さんが、父温の残りの資料並びに夫慎吾の資料も松山大学に寄贈したい、と申し出られ、9月に温・慎吾関係の資料類の寄贈を受けた。この時、本だけで3226冊、資料類はダンボール箱で108箱程もあった。実に膨大な資料であった。温関係では、帝国農会関係、愛媛県農会関係、各府県農会関係、農林省関係、愛媛県関係、帝国議会関係、帝国大学農科大学関係、別子の煙害関係、米騒動

関係、敗戦後の農民組合関係、種々の農業雑誌、機関紙、新聞、パンフレット、江戸から明治期の教科書、岡田家の家計簿、土地所有、温の原稿、論文、温への手紙・ハガキ類、そして、何より貴重な岡田温の日記があった。

これら寄贈資料は、いずれも貴重な価値ある第一級の生資料であり、また、歴史的記録であった。今、これら膨大な資料類の整理を進めている。資料を分野別に分類・整理し、目録を作るには、おそらく2、3年はかかるであろうと思われる。

さて、岡田温とは如何なる人物なのか、簡単に概観しておこう。

岡田温は、明治3（1870）年久米郡に生まれ、故郷で農業ならびに教鞭をとった後、29年9月帝国大学農科大学に入学し、32年7月に卒業。同年8月農事会本部に就職し、1年5ヵ月務めた後、33年末故郷に帰り、34年4月温泉郡農会技師に就任し、そして、38年5月愛媛県農会技師に、さらに大正2（1913）年12月からは愛媛県技師にもなり、県職員も兼務した。その間、温泉郡及び県内の農事改良指導・教育、別子銅山の煙害問題、愛媛県の農村調査、産業調査等に取り組み、多大な貢献をした。煙害問題で、越智郡農会からの委託を受け、実地調査を行い、明治39年11月住友の四阪島の精錬所の煤煙に原因があることを完膚なきまでに告発した。また、41年1月貴・衆両院に煙害救済の請願書の文案を作成したのも岡田温であった。そして、岡田温は愛媛県での農会活動の能力を買われ、時の帝国農会副会長矢作栄蔵（東京帝国大学教授）の要請により、大正10（1921）年4月帝国農会幹事に就任し、昭和11（1936）年9月まで実に15年6ヵ月間にわたり、帝国農会の幹部・リーダーとして活躍した。温は主として農業経営や生産費調査等を担当し、また、全国各地を行脚し、府県の農会メンバー・農民に対し、種々講演・講話を行った。また、政府が設立した各種調査会（米穀生産費調査会、小作調査会、米穀調査会、農村経済更生中央委員会等）にも出席した。その間、大正13年5月から地元農村青年に推されて選挙に出て、代議士を1期務めた（～昭和3年まで）。帝国農会退任後は、故郷に帰り、昭和14年11月からは郷里の温泉郡石井村の村長を務め、

また、18年2月には愛媛県食糧営団理事長に就任した。また、愛媛県の小作調停委員、農地委員会委員等にも就任した。敗戦後の23年には農民の熱意に推され、愛媛県農民組合連合会長に就任するなど、多方面で活躍した。そして、24(1949)年7月26日、80歳で亡くなった。

岡田温の生涯の軌跡(伝記)についての本格的な研究は、これまでには出されていない。これまでの簡単な略歴として、息子の慎吾氏の「父・岡田温を語る」、石橋幸雄「岡田温と系統農会」と娘の禎子氏の「死床に侍して」がある程度である¹⁾。今回の岡田家からの資料寄贈を機会に今後本格的に研究するつもりであるが、本稿では中間報告的に、温の少・青年時代、帝国大学農科大学時代の一端について紹介することにする。

I 温の少・青年時代

岡田温は、明治3(1870)年6月20日、父岡田為十郎、母ヨシの7人兄弟の長男として、久米郡南土居村七五番戸(22年温泉郡石井村南土居1050番地、現松山市土居町1050番地)に生まれた。幼名は新太郎である(25年12月に温と改名)。

岡田家は近世の高持百姓、土居村の草分け百姓であった。父岡田為十郎は、天保14(1843)年7月10日北土居村の越智喜左衛門の次男に生まれ、南土居村の岡田新吾家の養子となり、新吾・カネヨ夫妻の長女ヨシ(嘉永4年10月2日生まれ)と結婚し、明治12年7月養父新吾の死亡により家督を相続し²⁾、そして、村長にも就任した人物であった。

この頃の岡田家の土地所有面積は、慎吾氏の推定では4町歩程、石橋氏の推定では3町歩程の小地主で、自作を行う耕作地主であった。自作規模は不明で

1) 岡田慎吾「父・岡田温を語る」(愛媛県農業信用基金協会・農業信用保険協会『農業信用保証』第10巻第2号、1977年1月、岡田慎吾『傘寿閑話』1991年所収)、石橋幸雄「岡田温と系統農会」(中央農事報復刻刊行委員会『月報 中央農事報』No. 2、1978年10月)。岡田禎子「死床に侍して」(『岡田温先生頌徳——思い出集——』1962年10月)。

2) 新吾・カネヨ夫妻には、長男の義朗がいたが、家は長女ヨシ(義朗の妹)が継ぎ、義朗は分家した。

あるが、おそらく1町歩余りで、家族労働力の外に年雇の下男下女をつかい、耕作していた。

温は、幼少時から小地主の長男として育てられた。少年時代から向学心に燃え、南土居から松山町内の塾に通い、漢学を学んだという³⁾。

温が少年・青年時代を過ごした、明治10年代後半から20年代にかけての時期は、愛媛では産業革命が進行し(別子銅山、今治の綿織物業、南予の製糸業、松山等の紡績業等)、経済社会が資本主義化していったときにあたる。また、産業革命と並行して交通革命も進んだ。特に鉄道の敷設は早く、明治21年に伊予鉄道の松山・三津間が開通し、さらに25年に高浜にまで延長した。温の住んでいる石井を通る森松線(松山・森松間)は29年に開通した⁴⁾。

愛媛の近代化の時代に、温は少年・青年時代を送った。温は小学校、中学校を出ていると思われるが、この時期の履歴無く、詳しくは判らない⁵⁾。

温は明治25(1892)年5月7日から2ヵ月程、中国・九州地方を旅行している。21歳の時である。その旅行記が残っており、これが温の最初の日記となっている。この時は、親元を離れ、松山市に下宿していた。この旅行記によると、温は明治25年5月7日、友人に見送られ、松山市の宿所を出て、伊予鉄道にて三津に行き、三津港から石崎汽船の相生丸で広島の子品に渡り、以降、広島、岩国、山口、小倉、大分、別府、延岡、鹿児島、熊本、長崎、久留米、太宰府等を見て、小倉から船にて松山に帰っている。海路以外は全て徒歩である。日数不明だが、2ヵ月位かかっている。この旅行で温は各地を見聞し、大いに視野を広めている。普通、産業・文明の進んだ東京や大阪などを旅行するのが一般的であるが、遅れた地方を旅行している点、まず温の面目躍如たるものがある。

3) 岡田慎吾、前掲論文、8ページ。

4) 愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 近代上』愛媛県、1986年、716-722ページ。

5) 石橋の前掲論文では、温は農学校を出ていると述べているが、愛媛県農学校は明治34年4月開校だから、間違いであろう。明治28年2月20日の温の日記に「(愛媛)師範学会ヨリ、会員証来ル」とあり、会員ゆえ、愛媛師範学校を出ているのかも知れない。

その年の12月14日、新太郎を温と改名しているが、理由はわからない。

明治26(1893)年3月13日、温は北土居の越智喜作の長女・テル(明治6年8月1日生まれ)と結婚した。温22歳、テル19歳の時である。しかし、26年、27年の日記はなく、このときの事情、生活ぶりは不明である。

明治28(1895)年は2月9日から8月3日まで日記がある。日記から判明する特徴的なことを紹介しておく。

- ① 職業・土地所有規模について。職業は農業専業である。土地所有規模は後の記録から明治28年11月時点で3町6反9畝9歩程あった⁶⁾。自作と小作の区分は不明だが、一部は両親と共に、年雇の下男下女を使い、自作を営んでいたようだ。農産物は米麦等である。
- ② 家族関係等について。温・テル夫妻の間に、3月21日には長女清香が誕生している。だが、日記の記事では「女子出生ス」とあるのみである。また、両親健在だが、何故か温が弟、妹達の月謝を支払っていた。弟宏太郎(明治11年2月生まれ、当時17歳)には毎月80銭、妹クマ(明治14年2月生まれ、当時14歳)には月謝40銭を出している。特に、弟宏太郎は、27年6月松山市新玉の安長キヨへ養嗣子となっていたにもかかわらず、月謝を送り続けていた。おそらく、早くも温が家計の中心となっていたためであろう。
- ③ 教員就任について。結婚以来農業を続けていた温であるが、2月、教育者として名高い渡部明綱⁷⁾から教員就任の要請を受けた。そして、承諾した。3月11日から齋院小学校に赴任、小学校教員になった。齋院は土居からやや遠く、温は妻子を残し、弟宏太郎の養子先の安長宅に寄宿し、齋院学校に勤務した。単身赴任であった。

6) 明治34年の岡田温日記の12月の末尾より。

7) 教育者。嘉永7年松山湊町に生まれる。明治10年愛媛県師範学校を卒業。伊予、下浮穴郡の郡役所書記をへて、24年4月私立愛媛県高等女学校を創立。31年校長に就任。34年県に移管、松山高等女学校に改称後も校長を続ける。女子教育の功労者(愛媛県史編さん委員会『愛媛県史 人物』愛媛県、1989年)。

3月26日にはじめての給与を受けている。月給3円であった(但し、3月は24日分2円38銭3厘)。3円とは米1俵分にも当たらず、かなり低い給与であった。

6月10日、温に石井小学校への転任の辞令が出て、11日から石井校に転任している。おそらく、単身赴任をしていたので、郡役所の方で配慮し、自宅から通える石井小学校ということにしたのであろう。

- ④ 農作業について。教員をしていてあまり記述がないが、温の自宅では2毛作を行い、6月11、12日に小麦を刈り取り、24日に田植えを始めている(～28日)。温は毎日学校に出勤故、帰校後、農作業を手伝っている。だれが中心か日記には不明だが、両親と年雇であらう。
- ⑤ 家計簿について。温は日記の欄に収入、支出等を断片的だが、記している。後に温は家計簿をこまめに記しているが(明治45年～)、早くもその原型がみられる。また、金銭の貸借関係にかんし、頼母子講や親戚、個人間の貸借が非常に多いことである。
- ⑥ 日清戦争関係記事について。明治28年は日清戦争・戦後の時期である。それにかんする記事がいくつか見られる。2月14日には威海衛での勝利の記事、7月18日以降には、従軍兵士の凱旋に対し、生徒を連れて出迎えに行く記事がよく出ている。戦争に沸いた当時の温青年の興奮状況をかいま見ることが出来る。

II 帝国大学農科大学時代

岡田温は、明治28(1895)年3月から、齋院・石井校の教員であったが、慎吾氏によると、温は感ずる所があって、1年足らずで教員を辞め、29年2月23日、妻子を残し、東京に出た。東京の水産伝習所(後の東京水産大学)に入るためであった。この時、温25歳。晩学の志である。当時は農家の長男が進学すること自体が稀有なことであり、ましてや、すでに結婚し、子供もおり、妻子を残して東京に出ることは大変なことであった。上京進学の話が伝わると、近

隣では、「ネンキョウ（勉強の意）のため東京に出る」が一大ニュースになり、出発の当日は部落の代表者数名が羽織袴で高浜まで見送ったという。見送る者、見送られる者、それは今日の海外留学にも遠く及ばない程の「緊張」であっただろう。この勉強が許されたのは、両親特に賢夫人の聞こえ高い母ヨシ（嘉永4年10月2日～昭和15年1月31日、岡田家長女）の深い理解があったとのことである⁸⁾。

子供を東京にだすには、金が必要。岡田家は明治28年12月から29年4月にかけて、5件の田畑を売却している。即ち、明治28年12月に1反5畝18歩（北土居村の田畑、114円にて千三木弥三郎に）、29年1月に1反6畝17歩（同村の田、145円にて岡田隆太郎に）、同年1月1反1畝8歩（南土居村の田、98円にて大西安吉へ）、同年4月3畝18歩（同村の畑、35円にて岡田義朗に）、29年4月に4反3畝18歩（久米村の田、268円14銭にて森永信太郎に）、合計9反0畝19歩も売却している⁹⁾。

1 明治29年

明治29（1896）年の日記は2月23日の出国の日からある。温は2月23日に三津港を出発し、大阪に着き、大阪、京都、大津を見物し、27日の朝8時半東京新橋についた。宿泊は同郷の友人の重信喜太郎の下宿（神田猿樂町2丁目築陽館）に29日まで泊まり、3月1日から常盤会寄宿舎¹⁰⁾に宿泊した。

3月2日に、温は物理学校に入学した。温の上京の目的は水産伝習所（東京水産大学の前身）に入学するためで、物理学校ではないが、水産伝習所の入学試験は4月上旬で、それまで無為に過ごすわけにもいかず、また、常盤舎の規則上いずれかの学校に通学しなければならないためであった。

8) 岡田慎吾、前掲論文、8ページ。なお、慎吾論文では高浜となっているが、正確には三津港であった。

9) 明治34年12月の岡田温の日記の末尾より。

10) 松山藩主久松家が東京遊学の旧藩子弟のために設けた寮。明治20年東京市本郷真砂町に設置。明治24年から40年まで内藤鳴雪が舎監。正岡子規、秋山真之、河東碧梧桐などもここで生活を送る。

さて、水産講習所の試験は4月5日にあった。受験者も少なく、温は合格し、入学できた。しかし、その直後、温の進路が変わる。それは、4月14日、松山市出身で帝国大学農科大学林学科を卒業し、農商務省に勤めている山崎氏を訪れ、農科大学の実情を聞き、そちらの方に関心を示したからであった。

そして、温の決断は早かった。4月17日に物理学校を退学し、また、水産講習所も停学届けを出した。そして、20日には常盤舎も出て、同日猿楽町2丁目の築陽館に下宿した（友人の重信喜太郎がここに下宿していた）。その後、30日からは重信と共に、麹町上六番町地の中島光子方に、さらに6月1日からは神田猿楽町22番地の市野ヤス方に転居し、農科大学の受験勉強を行った。

ここで、温が目指した帝国大学農科大学について触れておく。農科大学は、明治23（1890）年6月、帝国大学が農商務省所管の東京農林学校を合併して誕生したものである。設置当時は農学科、林学科、獣医学科の3学科で（26年に農芸化学科ができ4学科）、修業年限は3年であった。農科大学にはそれぞれ乙科（実業者養成）が置かれた。乙科の修業年限は3年で、入学資格は年齢20歳以上（25年に19歳、28年に17歳に引き下げ）、田畑5町歩以上のもの又はその子弟であった。

農学科の学期は、設置当時は9月11日より翌年の9月10日までの2学期制であったが、25年に3学期制に改正し、また、28年にも日時を改正し、第1学期は9月11日より12月24日まで、第2学期は1月8日より3月31日まで、第3学期は4月8日より9月10日までとなっていた。

入学試験は6月末ないし7月初めで、入試科目は漢文講読、作文、国語書取、日本地理、算術であった。検定料は2円であった。そして学科に合格したものを仮入学させ、実習を行い、実習に耐えたものを入学させた¹¹⁾。

明治29年度の入学試験は、6月29日に体格試験があり、7月1日から3日にかけて学科試験が行われた。そして、温は学科試験に合格した¹²⁾。温の身元保

11) 東京帝国大学『東京帝国大学五十年史』1932年、1374-1429ページ。

12) 乙科の入学資格は田畑5町歩以上であったが、岡田家は29年6月時点では2町7反8畝20ノ

証人には、常盤舎の舎監・内藤素行（鳴雪）と松山出身の弁護士森肇に引き受けてもらった。そして、第二寄宿舎に入った。

温は7月16日に仮入学した。そして、17日から実習が始まった。この実習制度について、温はこの日の日記に、「蓋シ農科生ハ仮ニ入学セシメ、毎日実習ニ就カシメ、體質意向ナドノ果シテ将来実業ニ耐ユルヤ否ヤヲ驗シ、九月十一日ニ至リ、改メテ本入学ヲナサシムルノ制度ナリ。故ニ此間ニハ学科ナシ」と述べている。

温の体験した実習内容は、陸稲、水稻などの除草、麦打ち、馬鈴薯堀、草刈、菜種の種取り、大根の種まき、そば蒔き、畜舎掃除等々であった。その実習はかなり苦しかったようだ。例えば、8月3日の日記に「畜舎当番。午前草刈、午後麦引、本日交代ナク非常ニ疲レタリ。他ハ水田除草ニシテ、二年生ノ人達ハ麦打ナリシ」とある。また、24日の日記には「ソバ播ヲナシタリ。実ニ生来初メテ人糞ヲ握リタリ」とある。8月29日に実習が終了し、そして、温は実習でも合格した。

9月3日に農科大学乙科の新入生歓迎および卒業生送迎の送迎会が催され、参加している。この日の日記に「神田富士見楼ニテ送迎会ヲ催ス。出席員八十余名、非常ノ盛会ナリシ」と記している。

温が入学した当時の学長は松井直吉、農学関係の主要な教授陣は、玉利喜造、横井時敬、斎藤万吉、田中節三郎、本田幸介、松崎蔵之助、豊永真理等がいた¹³⁾。

9月11日、帝国大学農科大学の1年の1学期の授業が始まった。日記には、授業の記事は殆ど出てこず（化学、動物学等を受講）、実習の記事が若干記されている程度である（陸稲刈、麦蒔き、芋堀り、稲刈等）。他方、友人との語らい、友人宅に泊まり（重信喜太郎、内藤清、浅田岩吉等）、また、酒を飲みかわすなどの記事が記されている。

ゝ歩であるから資格は満たしていないが、何故か認められている。

13) 東京帝国大学、前掲書、1402-1409ページ。

11月1日に東洋一と称せらる農科大学の運動会が行われた。運動会には皇太子（後の大正天皇）も臨席していた。各科から造り物が出て、運動場を練り歩いた。この夜、温は大いに酒を飲み、斎藤万吉助教授宅を押しかけ、楽しんだ。この日の日記に「当夜ハ非常ニ酒ヲ呑ミ、放歌、放吟、終ニ斎藤助教授宅へ推送ミ、剣舞ナドシテ実ニ愉快ナリシ」とある。

温は研究熱心・調査熱心であった。10月10日には講農会（農科大学農学科の在学生及び卒業生の会）の例会に参加し、25日には友人（浅田ら）と東京西ヶ原農事試験場（明治23年素設置）に参観に出かけ、11月15日には友人6人と新宿の池養鶏場ならびに西ヶ原の試験場を見学に行き、22日にも友人と2人で神奈川県鶴見の農家を訪れ、促成栽培を見にいき、聴き取り調査などしている。

11月28日に化学の試験、12月11日に動物学の試験があり、15日に帰郷の途についている。温は友人6名と横浜港から出発し、16日に神戸に着し、そこで吉田丸に乗り換え、17日に広島の子品につき、翌18日の午後3時に子品を出て、故郷に帰った。

なお、国元よりの仕送りは、大体1ヵ月10円位であった。

2 明治30年

明治30（1897）年、温の農科大学時代、1年次の2、3学期から2年次の1学期にかけての時期である。日記は1月10日から12月31日までである。

明治30年の正月を故郷で過ごした温は、1月10日午後4時新脰川丸にのり三津港を出発、上京の道につく。神戸につき、それから汽車で大阪に行き1泊し、12日午前6時半の汽車で東京へ向かった。当時、大阪・東京間は18時間かかっていた。温は上京中、東海道線の農村風景をながめ、各地の耕地や作物の状況、特徴を観察し、書き留めている。温の面目躍如たるものを見て取ることができる。13日12時50分品川駅に着した。着後、学校に行ったが、前日の12日皇太后死去のため、5日間休校となっており、また、国民も30日間歌舞音楽を自粛し、喪に服することになっていた。

2月2日、皇太后の葬儀が青山練兵場であった。温はわざわざ見学に行き、その模様を活写している。温の皇室崇拜ぶりが見て取れる。「生涯又ト遭フマジキ最モ悼ムベク悲シムベク、又懂ムベキ我仁慈德澤優レ給ヒシ英照皇太后陛下御送葬ノ日ナリ……。陛下ノ御柩ハ黒塗ノ御輿ニテ前後ハ戸ヲ閉チ左右ニハ幕ノ下ヨリ御簾ノ見ヘタリ。サテモ今日コソハ陛下ノ咫尺シ奉リ其有難キ事既ニ涕ノ落チン斗リナルニ長ノ御旅ヲ送り奉ルコト我知ラズ涕ハ顔ニ溢レタリ」。

2学期の授業としては、害虫、無機化学等を受講している。2月4日からは実習が始まった。この日は脱粒、中耕、馬耕であった。

2月11日、学校の中央講堂や教室が全焼している。そのため休校となり、温はそれを利用して13日から3日間、同級生の友人2人（浅田岩吉、見山慶次郎）と神奈川に行き、川崎の大師河原にある学校の果樹園の調査・見学を行い、また、神奈川県庁勸農課へ行ったり、老農（川島勘左衛門）を訪問するなどしている。

2月25日に大学で講演会があり、長岡宗好、本田幸介両教授の台湾調査報告を聞き、温は新知識を得たと述べている。また、27日には講農会臨時集会があり、船津伝次平技師の桑樹の栽培方法と乃木氏の蚕種にかんする演説を聞き、これまた有益であったと述べている。

3月は、授業の他に実習が続く。実習では桑苗、苹果、桜、桃等の挿し木を習った。また、3月下旬には1年次の第2学期の試験があった。17日害虫、23日無機化学試験があり、カルシウムの問題で誤ったと慨嘆している。

4月から第3学期が始まった。1日から14日まで千葉、茨城、埼玉県に行った（農場実習であろう）。授業は12日から始まり、植物学、物理学、農具、気象学、害虫等を受講した。実習は18日から始まった。4月に畑打、ヤギ、綿羊の足のつめ切り、とうもろこしの種まき、水田の荒起こし、茶畑の手入れ、5月に養蚕、製茶、甘藍、ナスの移植、6月に養蚕、菜種収穫、麦刈り、田植え等であった。

6月には3学期の試験があった。8日植物学、22日物理学、24日農具、26日

気象学、30日害虫等であった。

温は、授業、実習の傍ら、よく友人宅（重信喜太郎、大島国三郎、永木薫一、仙波太郎、松本浩、見山慶次郎、村井清、大橋賢之助、浅田岩吉等）を訪れ、語らい、泊まったりしている。教師宅では内藤清宅をよく訪れている。そして、寄席、歌舞伎の観劇、碁、花見等を楽しみ、大学生生活をエンジョイしている。

6月に農科大学で学生による学校改革運動が起きた。それは乙科の教育が非常に実習に重きを置いているために、学生の中で、これを嫌厭するものが増え、卒業生にとってもまた社会に出て、就職した場合、学習不足を痛感するものが多く、こうした堆積した要求が改革運動に発展した。具体的には、教育方針の改善、乙科という名称の変更、教授科目の程度及び学科目の改善向上、研究科の設置、農場実習方法の改善等であった¹⁴⁾。

この学校改革運動に温は熱心に取り組んだ。6月28日に臨時講農会が開かれ、参加している。この日の日記に「臨時講農会開会。但し、学校改革ノ事ニ付キ、地方ヨリ特別会員ノ上京シタル為メ、其運動法ヲ打合セノ為ナリ。当日ハ本科ニ於テモ同邸ニ於テ茶話会ヲ催セリ」とある。30日にも運動委員の集会があり、参加した。

7月以降、温達は学長や教授に働きかけ、活発に運動を行った。1日、温は松井直吉農科大学長を訪問し、働きかけた。「午後ヨリ各教師ノ宅ヲ訪ヒ其意見ヲ叩ク。自分ト浅田ハ学長ト田中両氏ヲ訪フベキ役割ナレドモ、学長ノ内ニテ時間ヲ要シタルガ為メ田中教授ヲ問ハズシテ帰ル」。3日には田中節三郎教授を訪問した。「午後ヨリ浅田、見山両君ト共ニ本郷区金助町田中氏ノ邸ヲ訪ヒ、改正ノ意見ヲ開陳シテ、其ヨリ麹町ニ帰り一杯ヲ催シ、両氏ト別レ内藤ニ宿ス」。さらに4日には浜尾新帝国大学総長宅ならびに松井学長宅も訪れた。

「十一時半牛込築土八幡社ニ両氏ト会合シ、学長ヲ尋子タルモ不在ナリシ為メ、小石川花富町ナル大学総長ノ宅ヲ訪ヒ、同シク意見ヲ開陳シ、帰路、学長ニ面シ、同上ノ要務ヲ終リ、七時前帰校。本日ハ未ダ要領ヲ得ズ」。

14) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史 部局史二』東京大学出版会、684ページ。

7月、8月も実習があるが、記事はあまりなく(7月10日馬耕等)、専ら友人達との語らいや寄席などに行っている。

8月5日、温は友人数名と四谷大泉亭で開催されている政談演説会を聞きに行っている。この演説会の弁士は増田義一(読売新聞記者)と島田三郎(衆議院議員、進歩党、毎日新聞社長)であった。島田は商工ブルジョアジーの立場から地主制への批判をおこなったのであろう。この演説に対し、温は農民の立場から危機感を感じている。この日の日記に「六時前ヨリ数名ト四谷大泉亭へ演説会ヲ聴ニ出掛ケタリ。弁士ハ増田義一君(営業税ニ付キ)、島田氏(実業家ノ公心)ナリ。島田氏の演説中大ニ我農界ニ関シ警戒スベキ租税ノ説アリ」とある。

9月3日、温は講農会の幹事に就任した。学校改革運動などを活発に行い、在学生の中でも抜きんできていたためであろう。

9月4日、卒業生の送別会と新人生の歓迎会が神田の開花楼で行われた。しかし、この時、温は脚気にかかっており、酒を飲めず、「実ニ不愉快ナリシ」と記している。同日、1学年時の試験結果の発表があり、温は及第し、2年次に進めることになった。

9月11日、2年次の1学期の授業が始まった。作物、植物病理学、家畜飼養論等を受講した。また、農場実習は斎藤万吉助教授が担当である。雨の時は斎藤助教授は経済論を講義していた。9月24日「雨ノ為メ、斎藤助教授経論ヲ講義ス」、10月8日「強雨、斎藤助教授経論ヲ講ズ。実習休み」等。

10月、11月、学科と共に実習も行われた(実習の記事は余りない。10月1日とうもろこし収穫、11月12日甘薯収穫等)。

11月27～29日は田中教授の引率のもと、宇都宮農事試験場の見学に行っている。

12月には2年次の1学期末の試験があった。2日作物、7日植物病理学、11日家畜飼養論、15日肥料、20日園芸学であった。参考までに作物の試験問題を掲げておこう。(1) 米ノ栽培上其収量及品質ニ影響ヲ及ボスベキ主要ナル要件、

(2) 麦ノ施肥及ヒ中耕ノ法ヲ説明スベシ。そして、24日に授業が終わった。その年末は帰郷せず、東京で過ごした。

3 明治31年

明治31(1898)年は、温の2年次の2、3学期から3年次の1学期にかけての時期である。31年の日記は、7月6日(卒業生送別会当日の記事)と8月8日から12月31日までしかない。

31年前半の日記がないので、不明であるが、農科大学は31年5月に乙科を廃止して実科に変え、そして、入学資格およびカリキュラム、学科点数に大きな変更を行っている。その内容は、①入学資格をそれまで全部が田畑所有者又はその子弟であったが、凡そ半数だけとする。②カリキュラムは気象学及び地質学を加え、学科の時間を増加する。③学科点数について、従来科目平均点と実習点との和を2で除していたが、これを学科平均点を2倍し、それに実習点を加え、3で除する、というものであった¹⁵⁾。これは、前年夏以来の学生達による学校改革運動の成果であろう。また、卒業式の日程も従来9月であったが、7月に変更した。この卒業式の変更は在学生にも適用され、現3年生は7月卒業となった。

7月6日、卒業生の送別会が行われた。昨年までは、9月上旬に送歓会と称して、卒業生を送り、新入生歓迎会をしていたのだが、本年からは送別会だけとなった。あわせて、講農会の総会も開催し、その会則も改正することした。講農会総会は12時から大日本農会会堂にて開き、この会合には卒業生20人、特別会員(すでに卒業している会員)10人、通常会員(在学生)31人、教員5人(横井時敬、田中節三郎、本田幸介ら)が出席した。終わって役員改選を行い、幹事長に久次米邦蔵(特別会員、新)が選ばれ、温は幹事再選となった。これらの世話を温らが中心になって行った。送別会は5時から八百勘にて開いている¹⁶⁾。

15) 東京大学百年史編集委員会、前掲書、684ページ。

16) 『講農会会報』第三十六号、明治31(1898)年10月。

その翌々日の8日、父より帰れとの連絡が急遽あり、10日、温は松山に帰った。内容は不明であるが、恐らく、温に対し、学校を辞めて郷里に帰れと言うことであつたろう。

しかし、温の学問への情熱は固く、8月8日、再び東京に帰ってきた。この日の日記に、郷里に帰るときの憂鬱さ、東京に帰って来たときの喜びを次のように記している。「前月十日ノ朝、梶原、大島両君ニ送ラレテ学校ノ門ヲ出シトキハ何トナク、後髪ヲ引カル、カ如ク思ハレ、心モ足モ進マズ、且ツ幻ノ如クニ出タルニ引代ヘ、今日ハ宿年ノ鬱悶モ晴レ、一刻モ早く知人ノ顔ヲ見シモノト勇ミニ勇ンデ門ニ入リシトキノ愉快ハ世ニ喩ヘシ者モナク……（宮田君）余ノ顔ヲ見ルヤ、ヤーヤー帰ツタナート例ノ快活ナル挨拶、久シク沈鬱シタリシ気分モ消ヘ失セタリ。サテモ寄宿舎生活程面白キモノハ非ザルベシ」。そして、温が友人の清水君に帰国の挨拶に訪れたとき、友人の大島国三郎（同級生、京都府何鹿郡中筋村出身）が温に同情して、松山の国元に行き、両親に対し説得を行った話を聞き、その友情に対し、「感泣」している。

8月22日、実習が再開した。8月は苹果や梨の接ぎ木、大根、蕪、蕎麦の種蒔き、等の実習を行い、また、講農会の原稿などを執筆している。

9月11日から3年次に進み、1学期が始まった。授業は畜産学、林学、園芸学、獣医学、作物、農産製造学等を受講した。実習は砂糖の製造、藍の精製、インジゴ製法、とうもろこし、甘薯の収穫、キュウリの種まき等を行った。

11月12日、農科大学の運動会が行われている。農学科、林学科、獣医学科等から趣向を凝らした出し物も出て、温は農科大学の運動会を「全国、否東洋一ノ運動会ナリ」と述べている。

授業の傍ら、温は講農会幹事として、講農会々報の編集に従事していた。また、9月24日には、秋山亭で講農会の会合を開き、温も弁士となり、「慣習ノ勢力」と題した演説もしている。

温はまた農村調査に熱心であつた。休日には近郊の農家に行き、聴き取り調査をしている（9月18日には山梨を訪れ、10月15日には神奈川）。

温は、農家の租税負担に大に関心がある。9月4日の日記に各国納税者一人当たりの納税額（負担）と富力（所得）を比較し、日本の納税額は9ポンドで、高くないが、富力は0.091円で極端に低く、「其富力ト負担額ヲ比スレバ荷重ナルヲミルベシ」と断じている。また、この時期、日本新聞に地租問題についての論文（田口氏ト谷公ノ増税問題に関スル議論）を書いている。

温は、政治・政界の動きにも関心があり、観察も鋭い。明治31年は第3次伊藤内閣時（明治31年1月12日～6月30日）と大隈内閣（同年6月30日～11月8日）の時代である。伊藤内閣は5月、地租増税法案を提出したが、自由・進歩両党によって否決され、6月24日伊藤首相が辞表を提出し、後継に大隈・板垣を推薦し、6月30日大隈内閣が成立した（なお、自由・進歩両党は6月22日合同し、憲政党結成）。その隈板内閣時代、文相の尾崎行雄が8月21日、教育会でいわゆる共和演説を行う事件が発生した。それに対し、非難の声が起こり、10月24日尾崎文相が辞任し、後任を巡って閣議が対立し、大隈が独断で犬養毅を文相に任命したため、板垣ら旧自由党系が反発して、辞任し、10月31日大隈内閣は倒壊するという政変が起きた。これらに関する記事が日記にある。10月26日「尾崎文部大臣辞任後任者ノ選定ニ自進兩派ノ大混雜、為ニ或ハ分離スルカモ知レサルガ如キ形跡アリ。其ノ理由、過日教育会ニテ其演舌中共和政治ヲ云々シタルニ帰因スレドモ、其内幕ハ或ハ種々ノコンタン有ルカモシレズ、皇室ヲ持スルコトノ尊嚴ナル此ノ如キハ大ニ我国ノ誇ルヘキナレドモ、其原因他ノ排擠ニ出ツルモノトスレバ、我政治家ノ狭量ヲ歎セズンバ非ス」と。それは尾崎が皇室の尊嚴を批判したことに対しては温は賛同していないが、他の政治家達が尾崎を排除することに対し、「政治家ノ狭量」だとして嘆いている。また、10月30日の日記には、政変が天皇の「大御心」を悩ませたことを批判し、政党への不信任を次のように表明していた。「何時カラ我国ノ政治家ハ公事ヲ以テ私情ヲ抑留スルコト能ハズ、外交の機期（ママ）、内政ノ荒廃ヲ顧ミズシテ、私情的党派鬭争ヲ事トス。彼等ノ腦裏之ヲ弁セザルニハ非サルヘキモ、而モ事実ハ終ニ凡俗ニ類ス」。

12月15日、谷干城発起の地租増加反対同盟会の会合が芝公園内の紅葉館であり、温は参加している。温はいうまでもなく、地租増徴に反対であった。

このように、温の政治的スタンスとして、皇室崇拜、政党不信、農業本位の立場を見ることが出来る。

12月には3年の1学期末の試験があった(20日園芸学の試験等)。そして、22日に1学期の授業が終了した。

年末、温は故郷に帰らず、寄宿舎で過ごしている。

4 明治32年

明治32(1899)年、温の3年生最後の年である。7月に卒業する。この年の日記は、1月1日から12月31日までである。

1月1日、正月を東京で迎え、この日、各教師(玉利、本田、横井、田中、森等)訪問し、年始の挨拶に行っている。また、正月は友人と酒を飲んだり、カルタをしったりして、大学生活をエンジョイしている。

1月9日、3年次の2学期の授業が始まった。横井時敬の農業経済や獣医学、園芸、畜産学等の授業を受講した。実習は16日から始まった。豚の解剖、ビール製造、石鹼製造、三桎の皮取り等をしている。

授業、実習の傍ら、温は講農会の幹事として、もっぱら講農会々報の原稿を書き、編集、発行等に従事し、また、講農会の例会を行った。1月21日の例会では温が「品評会に就いて」と題し、演説をしている。

3月下旬に2学期の試験があり(16日園芸、22日畜産等)、3月末で3年の2学期が終わっている。

温の政界への批判は鋭い。3月7日の日記に帝国議会で議員が歳費増加を決めたことに対し、次のように憤慨している。「人民の膏ヲ絞り、自己ノ収入ヲ議ス。憲政モ落ニ至テ大ニ疑ヲ生セサルヲ得ス」。

4月1日から3学期が始まった。温は4月1日から9日まで長野地方を旅行している。帰後、授業が始まり、横井の農業経済や畜産学、作物、農産製造学

等を受講している。18日から実習が始まった。実習は養蚕、牛酪製造、ジャム製造、コンデンスミルク等々であった。

4月24日に玉利喜造先生¹⁷⁾の開講20年の祝賀式が行われている。松井農科大学長、浜尾新文部大臣、藤田農商務次官等が出席している。本田幸介教授が司会し、田中節三郎教授が感謝状を渡し、玉利先生が挨拶した。その挨拶について、温は「先生一同ニ向ヒ厚ク感謝ノ意ヲ表ス。言々涕ト共ニ出テ、其ノ『誠ニ身ニ余リタル』ト言ヒシー言ノ如キハ、是レ先生ノ硬直ナル肺腑ヨリ出タルモノニシテ、其ノ高德ノ然ラシムル者ナルコトヲ回想シ、非常ノ感ニウタレタリ。先生曰ク。余ノ今日アルハ畢竟先王氏有ルノ故ナリトシテ、我国農業ノ歴史ヲ伝記的ニ説キ、一場ノ演舌ヲ終(ル)」と記し、改めて、先生の実直で高德な人柄に感動している。

4月下旬、温の父・為十郎が突如として上京している(4月26日～5月16日)。その間、温は父を浅草、上野、宮城等々見物に連れていき、親孝行している。

6月に3学期の最後の試験があった。11日作物、16日農業経済、26日農産製造学等。

6月24日には卒業の口頭試問があった。しかし、あまり出来が良くなかったとみえ、温は「是レ平素万事ニ注意ヲセサリシノ報酬ナレバ仕方ナシ」と反省している。

7月8日に神田明神下開花楼で講農会第五回大会が開かれ、卒業する岡田は評議員に選出されている¹⁸⁾。

7月10日に帝国大学の卒業式があった。天皇臨席している。優等生(3年間

17) 玉利喜造は安政3(1856)年鹿児島藩に生まれる。明治13(1880)年駒場農学校本科卒業(第1回卒業)。その後、米国留学。20年東京農林学校、ついで、24年帝国大学農科大学教授を歴任。31年全国農事会本部常任幹事。33年幹事長となる。35年盛岡高農初代校長就任(全国農事会幹事長辞任)。42年鹿児島高農に転じる。大正11(1922)年貴族院議員。昭和6(1931)年死去(以上、岡田温「玉利先生と系統農会」中央農事報復刻刊行委員会『月報 中央農事報』No. 2, 1978年より)。

18) 『講農会会報』第四十三号、明治32(1899)年10月。

90点以上)に賞品が下賜されている。

7月13日に農科大学乙科実科の卒業式が行われ、温は卒業した¹⁹⁾。この日の日記に「乙科実科卒業証書授与式。学長式辞、田中、河瀬、原教授ノ演舌アリ。実科総代ノ染谷君、乙科総代トシテノ宮本君答辞ヲナス。農科ノ名誉ト云フベシ。式終リテ三科共図書館前ニテ撮影セリ。同窓一撮シテ解散スル。顧レバ二九年ノ七月初メニテ第二寄宿舎ニテ相見テ以来蛩雪ヲ共ニスル満三年、今ハ昨夢ノ如シ」とある。染谷(亮作)は千葉県東葛飾郡川間村出身、宮本(政蔵)は鳥取県高気郡鹿野村出身で、いずれも温の同級生である。卒業生は24名であった²⁰⁾。

さて、温の就職のことであるが、温は7月11日に玉利喜造教授(農事会本部の実務を取り仕切っていた)を尋ね、前途を相談している。そして、15日、玉利先生は温を連れて、(全国)農事会本部へ行き、そこで、前田正名(農事会本部幹事長)に紹介した。この日の日記に「玉利教授ト共ニ前田正名氏ヲ訪ヒ、渉介セラレタリ。農会本部ニ至リ役員諸氏ニ面ス」とある。そして、農事会本部入りが決まった。この時代については、別稿で述べることにする。

19) 大正2年に書かれた岡田温自らの履歴書には、農科大学の卒業年月を明治32年6月と記していたが、昭和13年に書かれた履歴書では明治32年3月、戦後の昭和21年の履歴書でも明治32年3月と記している。岡田慎吾の「父・岡田温を語る」の略年表も同様で明治32年3月15日とまで記している。事実は否で、日記から判明するように、32年の7月13日であった。このように、卒業年月という基本的なことがらに関しても、年月が過ぎると、人間の記憶というものは、本人でも曖昧、不正確になってくるものである。

20) 『講農会会報』第四十三号、明治32(1899)年10月。